

特別展 弥陀ヶ原の自然

観覧
無料

- 期間 9月29日(土)～12月27日(木)
- 場所 エントランスホール及 企画展示室

火山の活動や水の力により形成された神秘的な台地、弥陀ヶ原。弥陀ヶ原・大日平の湿地がラムサール条約に登録されたことを機に、その生いたちや動植物等について詳しく紹介いたします。

好評につき
会期延長!!



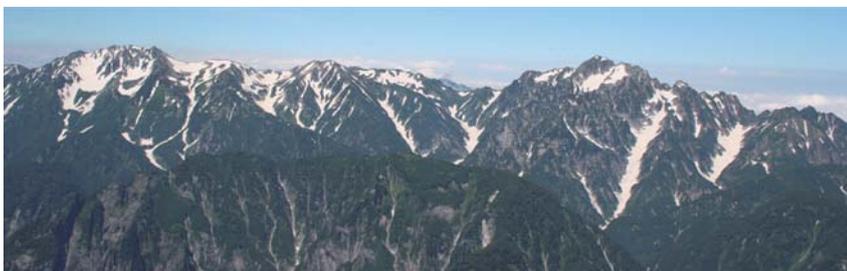
- 弥陀ヶ原の生いたち
- 池塘をはぐくむ雪
- 弥陀ヶ原に住む生き物たち
- 弥陀ヶ原の植物スライドショー
- 高橋敬市氏 写真コーナー

立山連峰の氷河

氷河とは、「重力によって長期間にわたり連続して流動する雪氷体（雪と氷の大きな塊）」と定義され、厚い氷体を持つこと、氷体が流動していることがその条件となります。これまで、日本には、「氷河」は存在しないと言われてきました。立山の内蔵助雪渓に厚さ30mに達する氷河流動の痕跡を残す氷体が存在することはわかっていましたが、氷体の流動が確認できなかったため、「氷河」と呼ぶには至っていませんでした。

そこで、立山カルデラ砂防博物館の研究チームでは、これらの大規模な万年雪の中で現在でも氷河として活動しているものが存在しないかの確認調査を実施しました。注目したのは特に規模の大きな万年雪で、立山の雄山(3003m)東面の御前沢雪渓、劔岳(2999m)東面の三ノ窓雪渓と小窓雪渓です。調査では、氷体の厚さ、氷体の流動量の2点を主に調べました。その調査の結果、御前沢雪渓、三ノ窓雪渓、小窓雪渓ともに、厚さ20mの積雪の下に厚さ30m以上の氷体が確認されました。特に三ノ窓雪渓の氷体は、最大の厚さが50mを超え、長さも1kmを超える日本最大級のものでした。また、流動観測では、三ノ窓雪渓、小窓雪渓で秋季の約1ヶ月間で30cm以上の比較的大きな流動が観測されました。各雪渓の流動量はヒマラヤなどの小型氷河の流動量に匹敵するものです。

これらの結果から、立山・劔岳の3つの多年性雪渓は現存する氷河と学術的に認められました。これにより、極東地域の氷河の南限がカムチャツカ半島から立山まで大きく南下することになります。また、これらの氷河は世界的に見れば最も温暖な地域に存在する氷河といえ、今後の調査でその独特の形成維持機構の解明が期待されます。北アルプスに「氷河を抱く山」としてのロマンと魅力が新たに加わりました。



立山連峰の氷河 左より御前沢氷河、三ノ窓氷河、小窓氷河

記 飯田 肇

博物館からのお知らせ

開館時間
休館日

年末年始の休館日
館内燻蒸のための休館

9:30～17:00(入館は16:30まで)
月曜日(祝日の場合は開館)
祝日の翌日(土・日曜日の場合は開館)
12/28～1/6
12/10～12/14